

## 里の変化が警告するもの—環境変容と里人の感性—

山形県内陸北部の山里である角川の里にも収穫の秋がおとずれた。田んぼは金色に輝き、周囲の里山も頂に近いところから徐々に色づき始めようとしている。雪が降り始めるまでは、この里の人々にとっては一年で最も忙しい季節の一つになる。田んぼと畑での収穫、里山に植えたキノコの収穫、奥山での天然のキノコの収穫、そして冬ごもりの準備、いくつもの仕事を同時に行わなければならない。これらの仕事は、一年間の里の仕事の総決算でもあり、来年へ向けての準備でもある。

さて、そんな忙しいはずのこの時期の日中、村道を歩いていると、集落の公民館に村人がたくさん集まっていた。「はて、みんな稲刈りで忙しいはずなのにな？」と思って行ってみると、なんと熊が捕獲されたということだ。既に射殺された熊を集落にいる住民がこぞって見物に集まっていたのである。体長 120 cm、体重 60 kg ほどの熊であったが、集落の住民もこれまで熊を見る機会はほとんどなかったのであろう、興味深そうに見ていた。

角川の里では、筆者がはじめて訪れた5年前には、またぎのおじさん達も「ここはね、熊が出ることはないんだよ、だから、猟ではもっぱらウサギやらカモやらを撃つんだよ」と教えてくれていた。それがここ3年ぐらいで熊の目撃情報が急増している。今までは絶対に出ないと言われていた集落に近い里山にさえ出没しているのである。

山に詳しいまたぎのおじさん達は、山での経験からこう話す。「なんと言っても山に木の実がなくなっているんだ。ブナの実はずっと豊作だったかわりに今年は不作。これはしょうがないとしても、庄内方面から被害が拡大しているナラ枯れの影響でドングリの実もならないし、それにやっぱり天気がおかしいんだな、アケビやらヤマブドウやら全然実ってこないものなあ。だから熊も困って里に出てくるんだよ。やっぱり天候がおかしいんだ。地球温暖化だなんだとテレビで入っているけど、これがその影響なのかもしれないなあ。」そんな矢先、ついに集落にまで熊が出没し、道を横断していった。角川の里では前代未聞のことだ。

農村集落、特に角川のような中山間地域の自然と隣接しているような集落の人々は、その集落を維持し継続して運営していくためにも自然や生態系に対して常に鋭敏な感覚を持っている。自然への「実践知」ともいえるべき独特な知的

伝統を持っているのだ。このような極めて小さい単位の地域集落における知恵や技術、自然への感性が、実は大きな地球規模の環境、生態系の見方へとつながるためのヒントとなるかもしれない。一方で地元住民にとっても土地に根付いた見方と同時に、地域の単位を越えたものの見方の広がりや要請しているかのようでもある。里に熊が出没する、里山の実り方がここ数年おかしい、冬の雪の降り方がおかしい、土地の古老も首をかしげるようなおかしいことがおこっているからだ。

地域が運営する角川里の自然環境学校の若者達は環境保全という視点からも外部と交流を始めた。先日、海辺での植林事業に参加し、地域を越えた環境教育や保全活動を展開していこうとしている。身近な自然の異変に鋭敏になりながら、より広い視点でものを見ていくことが必要だ。これからの時代、子ども達の時代は、古老の知恵や技術さえも越えた未知の自然異変が起こることが十分に予想される。それは人為的な影響が遠因となっているとはいえ、結局は自然を経由して我々に到来することになる。

こうして見ると里の環境教育や自然体験活動は、単なる自然愛護の取り組みではないし、まして田舎体験をレジャーとして提供するだけのものではないと言えるだろう。人と自然が生きていくために、現代人にとって、そして次代を担う子ども達にとって自然生態系への感性を養う必須の営みなのである。